特集③

リスペクトF.C.JAPAN シンポジウム

～暴力根絶に向けて～

日本サッカー協会（JFA）はリスペクトの推進のためにリスペクトF.C.JAPANを設立し、2011年より毎年シンポジウムを開催しています。3回目となる今年は、9月7日に日本サッカーミュージアム内のヴァーチャルスタジアムにて、「リスペクトF.C.JAPANシンポジウム～暴力根絶に向けて～」を開催しました。当日は、大仁邦彌JFA会長のあいさつ、眞藤邦彦氏による基調講演「暴力根絶に向けて」に続き、ゲストを招いたパネルディスカッションを実施。今号ではパネルディスカッションの模様を抜粋して紹介します。

シンポジスト

上川徹（元国際審判員、JFA審判委員会委員長、リスペクト・フェアプレー委員会委員長）
眞藤邦彦（JFA技術委員会 指導者養成ダイレクター）
森島寛晃（元サッカー日本代表選手、セレッソ大阪アンバサダー）
山口香（元柔道選手、筑波大学大学院准教授、日本オリンピック委員会理事、全日本柔道連盟監事等）
綾部美知枝（JFA競技会委員会 第4種大会部会長）

上川徹氏　©Jリーグフォト

上川　ここからのパネルディスカッションでは、基調講演を受けて、サッカー界、スポーツ界での暴力根絶に向けて、「しない、させない、許さない」ということをリスペクトの観点からどのように考え、どのように行動していけるか、皆さんと考えていきたいと思います。まずは皆さんから、自己紹介を兼ねて一言いただけますでしょうか。

綾部　私は、実は小学校の教員になるまでサッカーとは無縁でした。子どもたちと仲良くするために、放課後に一緒に遊んでいたら、その中の一人が「先生、サッカーやろうよ」と誘ってくれました。でも、残念ながら私はサッカーを知らない。ルールも全く知らない。「ごめんね、先生はサッカー知らないから」と断ったのです。そうしたらその子がこう答えました。「先生、あの白い枠の中に先生がボールを入れたら先生の勝ち」。私が最初に知ったサッカーのルールは、まさにサッカーの楽しさそのものでした。

そこから子どもたちと毎日ボールを蹴るようになり、子どもたちと触れ合っていると、彼らの変化に気が付きました。サッカーをやりたいから自分の生活がどんどん変わっていくのです。この子どもたちをどんな子どもに育てたいかと考えたとき、サッカーを通して強い子どもを育てたいと、それが私のきっかけでした。そして、サッカーと出会った、子どもたちと出会ったおかげで、指導者と出会いました。また、子どもたちの保護者とも出会いました。子どもたちのあの一言がスタートで、多くの方々に出会いました。今日もここで初めてお会いする方もいます。子どもたちに「先生、サッカーやろうよ」と言われたその言葉が、キックオフのホイッスルとなりました。

山口　皆さんがご存じの通り、この暴力問題のはじめは、女子柔道のナショナルチームで起きた暴力が非常に大きな社会問題として取り上げられたことでした。私自身が柔道の組織にいますので、非常に責任を感じていますし、こういった取り組みには積極的に参加させていただきたいと思っている中で、今回お声をかけていただき、非常にありがたく思っています。このリスペクトの取り組みについては以前より伺っていて、サッカーはすばらしいなと感じていました。

こういう問題を話すときに、「きれいごとではないか、結局は勝たなければいけないんだよ」という議論も、私たちトップスポーツをやっていた人間には確かにあると思います。ただ、だからこそ、それでもきれいごとを言わなければいけないのではないかと強く思っています。柔道は格闘技ですから、やっていること自体が既に暴力のようなものです。だから子どもたちに、「柔道で礼をしなかったらケンカと同じだ、礼で始まり礼で終わるから柔道になるんだよ」と言っています。これは日本人の考え方で「型」から入るということに通じます。初めは、礼の意味なんて子どもたちは分かりません。でも礼をさせていくことによって、それが相手をリスペクトすることにつながっていく。意味は後からでも教えていかなければいけない。このプロジェクトは、それを言い続けて示していくことだと思っています。今回いろいろな問題があった中で、私たちはそれをさらに強く言い続けていかなければいけないと考えています。

森島　私は小学校からサッカーを始めて、プロ生活も送った中で、いろいろな経験をさせてもらいました。そこから私自身、選手を辞め、今

度は指導者として子どもたちと向き合っていくようになり、今日、僕はここにいますが、指導者としてどのように携わっていくべきかというのをあらためて学びたいと思っています。僕自身もリスペクトするというのはすごく大事なことだと感じています。というのも、小学生のときに一時、自分自身がうまくなりたいというのを勘違いして、自己中心的になってしまったことがあります。そのときに恩師から、サッカーノートを通じて「そんなプレーはペレでもしない」と、仲間の大切さを書いていただいたことをずっと大切にしてきました。恩師から「周りを思いやる気持ちがない選手は日本代表にはなれない」と言われたことがすごく頭に残っているのですが、実際にプロ選手になり、日本代表になり、周りの選手を見ても、負けたくないという気持ちをすごく強く持っているのと同時に、どの選手も相手を思いやる気持ちを持っていたと思います。自分もそういうことの大切さを学んできた中で、今日こうして皆さんといろいろ話をしながら、あらためてリスペクトする思いの大切さを学べたらと思っています。

上川　暴力による指導は、社会の中で、ある面では容認され続けてきた問題だと思います。このテーマを話し合っていく上で、まず暴力はいけない、重大な問題だということを認識する必要があると思います。暴力問題の現状について、眞藤先生から口火を切っていただけますか。

眞藤　未来に向けて心を開き、いろいろなことを考えていかなければ次には進めない。一人一人が根本的な考え方を変え、スタートしないと変わらないと思っています。今年2月からいろいろな取り組みをしていく中で、「しない、させない、許さない」を、いろいろな方と相談しながら進めてきました。ところが、やはり「そうは言っても…」「なかなか根が深いし難しいよ」「実際現場では難しいな…」という声をたくさん聞きました。ただ、難しい難しいと言っていたら根絶にはつながりません。どういったことを考えていけばいいのか、日本の将来を大きく捉えて、自分自身も悩みながら一緒になって皆で考えて、一人一人が取り組んでいけるようにしていきたいと考えています。このシンポジウムが終わったときに、自分を含めて皆さん一人一人がこうしたら関われるのではないか、何か取り組めるのではないか、ということを感じていただくことができれば良いなと思っています。

上川　暴力の問題は非常に根が深く、ちょっとした禁止、通達、研修等で簡単に解決できるようなものではありません。特効薬的なドラスティックな解決策は難しいということになると思います。だからこそわれわれ一人一人が持っている意識を変えていくということが、たとえ遠回りだとしても大事なことだと考えます。暴力の即効性は一時的なものです。一時的な解決策とも言えます。表面的には何か変わるかもしれませんが、スポーツの本質に立ち返ると必要ないものであると思います。

まずスポーツ界全体の展開についてですが、日本体育協会（日体協）や日本オリンピック委員会（JOC）、日本障害者スポーツ協会、全国中学校体育連盟（中体連）、全国高等学校体育連盟（高体連）が一緒になってスポーツ界における暴力根絶宣言が出されています。本日、日体協の方にいらしていただいています。経緯等をお聞かせいただけますでしょうか。

日本体育協会スポーツ指導者育成部・岡達生氏　4月25日に日本のスポーツ界の5つの統括団体が集まり、暴力根絶宣言を採択しました。これは、この5団体だけでなく、当然そこに加盟している競技団体、都道府県体育協会を含めてのものになります。経緯としては、1月に発覚しました大阪の高校のバスケットボール部キャプテンの自殺の件、そして柔道女子代表の件、そういったことがきっかけで、社会的に大きな問題になり、文部科学大臣からも日本スポーツ界の最大の危機であるという声明がありました。もちろん宣言を出したことだけで全てがうまくいくとは思っていませんし、先ほどからもありましたように根が深い話だと思っていますので、何年かかるかは分かりませんが、根絶に向けた取り組みをいろいろな形で継続的にやっていくことになります。

上川　「必要悪」といった誤った考えを捨てることが大切になってくると思います。簡単な問題ではなく、時間がかかるかもしれませんが、一人一人が意識を変えて強く臨んでいく必要があると思います。

JOCが選手と指導者にアンケートを行い、回答を得ています。さまざまな反応がありますが、本当に嫌だった、許せない、トラウマになった、辞めたくなったという声がある一方で、信頼関係によるのでは、全部だめだというのは難しい、という声も聞かれています。また、自分を育ててくれた、愛情をもって真剣に向き合ってくれた、感謝しているという意見もあります。

山口　この一連の暴力問題を受けて、JOCとしても、ジュニアのレベルに至るまでの強化選手、そして指導者にアンケート調査を行った結果、約10%強の選手が、暴力やパワーハラスメント（パワハラ）を受けたことがあると回答しました。これを多いと思うか、少ないと思うかはそれぞれ違うかと思います。私たち研究者はよくこういったアンケートを行うのですが、今の選手たちは自由記述というと面倒なのかほとんど書いてきません。でも、今回のアンケートでは自由記述のところも比較的丁寧にそれぞれの思いを書いてくれました。彼らがこの問題について向き合いたいと思っている表れだと思います。それを私たちがどう受け止めて、どのようにこれからのスポーツ界を変えていくかという議論をしていかなければいけないと強く思いました。選手たちも戸惑っている部分があります。でも彼らもそれを乗り越えようと葛藤している姿を見ました。指導者も同じです。簡単ではないですが、そういう思いが集まって一歩前に進めるのではないかという印象を受けました。

森島寛晃氏　©Jリーグフォト

上川　一部、真剣に向き合ってくれた、愛のむちだ、というように肯定している人もいます。その辺の理解をしつつも、やはりそういうことは止めていかないといけない。

山口　非常に難しいのは、成功体験と一致しているところがあることです。そして、自分がやってきたことに対する肯定なのです。そのときがあったから今がある。あの厳しい指導があったから自分は育った。暴力を否定してしまうと自分がやってきたことを否定してしまうような葛藤が指導者にも選手にもあります。ですから、そうではないんだ、やってきたこと、頑張ってきたことは否定されるものではないのだ、ということを少し丁寧に説明していく必要があると思います。

森島　多くの日本代表選手は、お互いが負けたくないとか、結果を出さなくてはいけないというプレッシャーの中で集まります。結果を求める中で試合に出られないのが悔しいという選手が、当然その中から出てきますが、チームのために自分もやらないといけないという強い思いを持てない選手は、その中にはいませんでした。相手の気持ちを分かった上で、自分の気持ちを抑えてチームのためにやるという考えが大事だったと思います。

上川　暴力と同時に暴言という問題もあります。綾部先生、長く小学生年代の子どもたち

のサッカーに携わってきていかがでしょうか。言葉は特に境目が難しいですね。それで心を傷つけてしまったり、相手を否定したりしてしまう。子どもたちや指導者をご覧になって、言葉について感じることがあればお願いします。

綾部　コーチや、特に高学年の先生が低学年の子どもと話をするときの大人の言葉は難しいですよね。この世に生まれて6年程度、覚えた言葉、知った漢字など、大人と子どもには大きな差があります。ところが大人はその差を感じないで平気で子どもと話す。ですから、難しい言葉やカタカナの言葉をたくさん話します。子どもは優しいですから、あたかも分かったようにうなずいてはいるのですが、理解していることはそうたくさんはありません。そういう中で指導者の話している言葉が理解できず、それに対して誤った動作をすると、大人は自分の言っていることが伝わらないので、まず声が大きくなって、「お前分かっているのか?こんなことが分からないのか?」等の暴言につながります。暴力も私は若干見てきました。やはり大人と子どもの対決は、子どもが弱者です。大人はどちらかというと上から目線で子どもに対応しています。目線を下げて子ども側に立って、自分が話す前に子どもから聞き出す。私は先輩の先生に、子どもの本音が聞ける指導者が一番良い指導者だと言われました。「先生、あのね」「監督、実は僕ね」。「あのね」という言葉が出ることが、子どもと指導者のコミュニケーションがうまくいっていることだと私は評価します。そのコミュニケーションがあればどんな話をしても大丈夫ですし、子どもが分からないことは分からないとはっきり言えるようになります。そういう子は伸びてきます。ところが分かったふりをして、「はい、はい」と聞いている子は、結果的には本当に自分が何を言われたか分からないということになります。そういう中で、大人は我慢できなくて手を上げたり、暴言を吐いたり、大声で子どもを威嚇するのです。そういう子どもは伸びません。子どもは、安心した状態の中で話ができるし、サッカーは楽しいものだと感じることができるのです。子どもと一緒にいると楽しいという方が私は指導者として“はなまる”だと思います。サッカーのみならず、おうちのことや遊びのことを聞いてあげたり、またはサッカーだけでなく一緒に山に登ったり、そういうことをしながら、大事なサッカーを通してその子に何を気付かせていくかということが大事だと思います。

上川　暴言あるいは暴力ということは、先ほども言いましたが、一時的な即効性はあるかもしれませんが、本当の意味での解決にはなっていない。そして、即効性があったから、また同じような方法をとるようになる。そしてそれがエスカレートしていき、ついには大きな問題につながっていく。そうなるとスポーツ本来の意義や楽しさが失われてしまいます。

眞藤　今、綾部先生が言われたように、子どものことを考えられる指導者がとても大切です。子どもの側にも、うまくなりたい、教えてもらいたい、ということで少し依存があることも確かです。つまり、指導者は権力を持っているということを自覚しないといけないと思います。本来、いろいろなことに関わっていける、働き掛けていけるということですが、それを少し勘違いして、こんなことをしてやった、これを教えてやった、ということになり、良かれと思っていたことでも自分で気付かないうちにエスカレートしていくということが起こるのだと思います。それを指導者として自覚しておく必要があります。子どものことを分かって、その子に合わせて何かを伝えていくためには、いろいろなことを勉強する必要があります。その子がどうしたいのかを本気で考え、その子の将来に向けて「今、どのように声をかけてあげたらいいか」というふうに考えてあげられたらいいと感じています。

上川　アンディー・ロクスブルグさん（前ヨーロッパサッカー連盟テクニカルダイレクター）の言葉にもありますが、「皆さんは、選手の未来に触れている」。イビチャ・オシムさん（元日本代表監督）は「明日、子どもがどんなプレーをするか楽しみに指導する」と言っています。まさにこういう気持ちが必要なのだと思います。一方で、暴力や暴言に関する重大な問題が起きています。JFAでも相談窓口を開設しています。その窓口に寄せられる事例、介入や解決の難しさについて、少しお話を聞きたいと思います。

JFA技術部・島田信男　6月24日にJFA理事会の決定をもって暴力根絶相談窓口を開設しました。先週末までに寄せられている相談は32件です。内容についてはいろいろな問題があって紹介できないのですが、U-12年代、U-15年代、U-18年代とそれぞれあります。一番多いのはU-12年代です。相談内容は暴力や暴言などたくさんあります。通報してくるのは、お子さんが暴力や暴言を受けたという方が一番多いですが、それを目撃された方からもあります。往々にして、その方々はそのチームを去っていますし、さらには、サッカー自体をやめてしまっているケースもあります。また、その子が心的なダメージで適応障害や不登校等の症状が出るまでになってしまっているケースもあります。通報を受けている私どもの立場としては、被害を受けた側がチームを去らなければならない、サッカーをやめなければならないということ、そしてそのチーム自体の実態はなんら変わっていないということは、大きな問題ではないかと捉えています。

山口香さん　©Jリーグフォト

上川　対応の難しさがある。また、対応が遅れてしまうと大事に至ってしまう恐れもあります。やはり問題を起こさないためにエネルギーを使っていく、意識を高めていくことが一層重要になってくると思います。

スポーツは本来、自発的に、自主的に、自分で考え、楽しく行うものであると思います。森島さん、サッカーを始めた頃の思い出などを聞かせていただけますか。

森島　周りの友だちがやっているのを見て、楽しそうだなと思って始めました。それから、日本代表で活躍している選手を見て、自分もそういうふうになりたいという目標ができ、そのためにもっとうまくなりたいと思ってどんどんのめり込んでいき、やる気が起きました。子どもたちがそういうふうに、どんどん未来に向かって夢を持ってやっていけるような、自分自身が子どもの頃に抱いたようなワクワク感を持ってやってもらいたいと思います。

山口　柔道は楽しくはありません。つらいことが多く、本当にサッカーを見ていてうらやましいと思います。子どもの頃は、休み時間でも子犬がじゃれ合うように遊んでいるのですが、カテゴリーが上がってくると、休みというと少しも動かずにじっとエネルギーをためています。サッカーは日本代表の選手たちを見てもいつもじゃれ合っていますよね。これがサッカーの本当の姿なんだなと感じています。ただその楽しさと勝つということと、どちらに向かわせるか。難しいことですね。指導者はどうしても勝たせたい。勝った喜びを味わわせたい。そこでついつい行き過ぎて、となってしまう。

先ほど暴言の話が出ましたが、どれだけきれいごとを言っても指導者は自分の心に手を当てて考えてみれば、傷つけてしまうことがある。親だってそうですね。親が子どもを怒るとき、「そこまで言わなくてもいいんじゃないの」と思

うけれど、もう感情がコントロールできない。そこを指導者がまずは自覚することだと思います。もう一つは、暴言を受けた選手以外の選手も嫌な思いをしているということを知ることです。相手チームが暴言を吐かれているのに、見ている側も気持ちが沈んでしまう。その影響力を知るということ。さらにもう一つ感じていることがあります。海外の柔道選手との試合では、あまり強くない相手との試合もあり、これは楽勝だなと思って出ていっても、相手が妙に自信満々なことがあります。そうすると不安になります。でもやってみるとやはり弱いのです。それがなぜ起きるのか、イギリスに行って分かりました。イギリスの指導者は選手に、失敗しようがひどい技だろうが、ダメだと言わないのです。彼らは自分が下手なことに気付いていないと分かりました。だから妙に自信満々なのです。私は選手を見ていて、自信は大事だと思います。指導者が暴言を吐いたり脅かしたりすると選手は委縮します。これは日本のスポーツ界全体の問題です。ダメだとか、こうだと言い切ることが選手を委縮させてしまう。もっと思い切ったプレーができるのに、失敗してもいいのにと、思うような選手が育ってこないのかなと、自分の反省もしつつ感じています。

上川　スポーツは楽しむことが大前提です。安心、安全、そして人間性を育てるということ、自信をつけさせるためには、自立できていないとそこまでたどり着けないのだと思います。スポーツの本質をわれわれは失わずに子どもたちを育てていくことが大切だと思います。

眞藤　先ほど森島さんからもあったように、子どもたちがそれに夢中になっていく、夢中になれば自分でも練習する、そうした中でライバルに負けたくない、勝ちたい、あるいはチームスポーツでは仲間と協力して目標に向かって取り組む。そういう内に湧いたエネルギーが出てくるのだと思います。そういうところがスポーツの大事なところだと思います。

上川　では、「しない、させない、許さない」ということについて。まず「しない」ということで、何が大切になってくるでしょうか。

眞藤　やはり学ぶこと。自分のためでもあるのだけれど、選手のためにやっていくことが自分のためにもなっていくと考えることが大事だと思います。子どもの成長を、将来を見据えて思い描けることが大事であり、そういうことをしっかり伝えていく中で「しない」というところに入っていきたいと思います。指導者養成で言うと、その子の成長やレベルに応じた指導ができるようにカリキュラムの中でしっかりと伝えていきたい。高い視座で子どもの将来を見据えた指導をしていくのにどうしたらいいかを考えていくことで、指導者一人一人が暴力や暴言ではなく別の方法で子どもたちに伝えていくことができるのではないでしょうか。

先ほど選手のアンケートに、愛情を感じて頑張れというのがありましたが、もっと別の方法で指導者は伝えることができたのではないでしょうか。選手にとっても、暴力そのものでなく、その指導者が真剣に向き合ってくれたことが大事だったのではないかと思います。そのことをしっかりと伝えていけるようなものにしていきたいと考えています。そういう意味で、指導者養成のライセンス講習とリフレッシュ研修をもっと充実させていかなければならないと思っています。それから、選手一人一人に向き合える指導者の配置をしていきたいと考えています。「義務化」と言うといろいろ壁があるのですが、頑張っている人たち、あるいは勉強しようとしている人たちをサポートできるようなものをつくっていく中で、「しない」というところに踏み込んでいきたいと思っています。

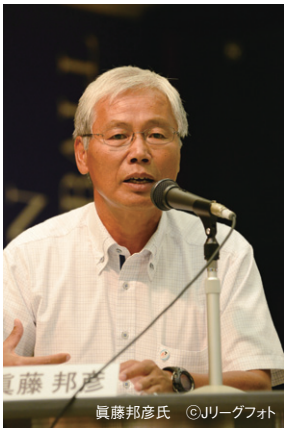
上川　ライセンスの話が出ました。4種の中では、チームに必ず一人以上指導者資格を取らせるということが、2005年からスタートしました。反応等、何かありましたでしょうか。

綾部　D級ライセンスを取らなければいけない、義務だ、と上から言われると、今まで30年もやってきた人たちは「いや、そんなの今さら受けなくてもちゃんとやっているよ」と言いたくなる。D級の中身を知らずに形ありきだと、躊躇（ちゅうちょ）してしまった方もたくさんいました。でも私は、D級を皆さんに受けていただきたい。なぜ受けていただきたいのかという中身を理解いただけると、納得いただけると思います。指導者も常に学ぶということは大切なことですし、自分自身が分かっているつもりでも、さまざまな情報がここで共有化されます。また、技術だけでなく、サッカー界で起きている新たな話題にも触れられます。さらにもう一つ、私が一番大事だと思うのは、講習会で出会った指導者仲間同士でコミュニケーションがとれ、指導者同士の輪も広がっていくということです。講習会を皆さんに受けていただきながら常に学ぶことが大事だと思います。D級を、ということだけでなく、指導者の人間性の問題だと思うのですが、全てのものから学ぶ、子どもからも学ぶ姿勢というのが、特にU-12年代では大事です。大人が気付かないようなことを、子どもたちから教えてもらったりします。

私がサッカーの指導を始めた当初、日本の子どもたちは、右利きなら右足しか使いませんでした。今から40年ほど前、オベラーツ（元西ドイツ代表）という選手の引退試合を子どもたちと一緒に見たことがあります。そのときある子が私にこう言ったのです。「先生、明日から左足の練習しようよ」。オベラーツ選手は左利きですごくうまい選手だったのですが、その左足を見て、子どもは自分が左足を使えないから練習したい、と言ってきました。びっくりしました。私はただ「すごい、すごい」と見ていただけだったのですが、子どもはしっかりとオベラーツ選手の左足のテクニックを見て、学びたいと言ってきた。子どもは侮れないなと思いました。また、大人が分からないふりをして子どもに考えさせることも大事です。大人が分からないと言うと子どもはすごく良い気持ちになります。「じゃあ、教えてあげよう」となって、教えることから学びという姿勢をとり、子どもは一生懸命考えます。考える、考えさせるということが指導だと思います。

山口　柔道では、遅ればせながら、今年度から、ようやく指導者資格を導入して講習会実施という取り組みを開始しました。特に若い指導者の方は、一国一城の主になってしまうと、分からないと言えないとか、どうやって勉強したらいいのだろうという悩みが意外とあるものです。綾部先生もおっしゃられたように、指導者同士で疑問をぶつけ合ったり、悩みを打ち明け合ったり、ネットワークをつくっていくことは良いことだと思います。サッカーをやっている人は握手をしますね。指導者が子どもとも握手をする。柔道ももちろん礼をしますが、触れるというのは大事なことだと思います。柔道もぜひそういうところを取り入れてやっていきたいと思っています。

眞藤　相談、ネットワークの話が出ましたが、気軽に相談できることは大事だと考えています。指導者は日々、一生懸命やっていると、閉鎖的になっていて、聞く相手も自分の指導を見ている人さえもいない場合がある。日々、子どもと向き合って悩みながらやっている中で、気軽に相談できることは大事で、「させない」にもつながっていくことではないかと考えています。


眞藤邦彦氏　©Jリーグフォト

「しない」のところでは、先ほど綾部先生が言われましたが、D級について、4種ばかりで

なく育成年代についても取っていただけるような仲間を増やしていきたいです。そうは言っても部活動の顧問の場合は必ずしもなろうとしてなっている人ばかりではないので、そういう人たちにどういう働き掛けをしていったらいいかということは考えていきたいと思っています。

上川　ではその「させない」について話を進めさせていただきたいと思います。

眞藤　「しない」というところは、今のような形で取り組んでいけることが少し見えてきています。ですが、「させない」について考えると、今の社会で、例えば電車の中で何か良くない行動があったときに「あなた、それダメですよ」と言うことを躊躇(ちゅうちょ)してしまう面があります。難しいですが、スポーツ界だったら何かできるのではないかということを考えていきたいのです。スポーツ界の仲間としてやっていきたい。ただし、誰もがそういう意識でできるようになるには時間がかかると思います。まずはそういう担当、役割の人をつくりたい。先ほど綾部先生と雑談をしている中で、以前は大会本部に技術委員がいて、その方がゲームの後に良かったこと、課題があったことを伝える体制があったと伺いました。大会を通じてであれば、例えばそういう役割の方がいて、皆にも周知されていて、何かあればその人が注意する。制度としてそういうものをつくる必要があるのではないかと考えています。大前提としては、大会ばかりでなく、日々の中でお互いが声をかけられるようなものはどういうふうにつくっていったらいいかを、今、考えているところです。

上川　「させない」ということ。自分がしないだけではなく、見たりあるいは聞いたりした場合にそういうことに対して、おせっかいではないですが、声をかけられる。そういう社会に変わっていくべきだということですね。また、そういうことをスポーツ界から発信できていけば良いと考えます。暴力あるいは暴言については、連鎖、再生産していくこともあると認識しています。指導者から選手に、それが選手同士にもつながる、あるいは選手が指導者になったときに同じようなことを選手にする。これについて、何かお考えはありますか。

眞藤　まず「しない」ということを根付かせていかないといけません。暴力を受けた鬱憤(うっぷん)晴らしを自分よりも弱い相手にするようなことは止めなくてはならない。学生にアンケートを行うと、約4割が過去、体罰を受けたと答えています。では指導者になったときに体罰をすると思うか、と聞いたときに、3割弱が、時には必要、するかもしれない、と答えています。そういった部分も含めて考えたとき、やはりもっと根のところにアプローチしていかなければなりません。先ほどあったように、愛のむちや愛情に感じて後輩に伝えてしまう。それに対して働き掛けていく必要があります。しない、させない、暴力・暴言は絶対にないのだということを浸透させていくための取り組みを継続していくしかないと思っています。

山口　私は、外の目を入れるというのが良いと思います。例えば先輩がよく訪ねてくるとか、ご近所の人が見に来るとか、そういう近場で良いのですが、そういう目が入ってくると随分閉鎖性が解かれます。いろいろな人が意見を言う。例えば監督も選手から言われたらふざけるなと思うけれど、ちょっと年の離れた教え子だったりすると、先生最近丸くなりましたね、とか、最近指導変わったのではないですか、とか、選手が生き生きしてきましたよ、などと言ってもらえる。「暴力が」ということで杓子定規に考えるよりは、いろいろな人が出入りする、見に来るような環境をつくっていくということも重要なのではないかと思います。

森島さんにお伺いしたいのですが、柔道はやっていることが直接的なので、相手に怒りを直接ぶつけられるものです。でもサッカーを見ていると、熱くなってレッドカードをもらう選手も中にはいますが、意外と怒りをコントロールする。選手はうまくコントロールしているのに、なんで監督やコーチはその怒りがコントロールできないのかなと感じています。選手はどんなふうにやっているのですか?レッドカードがちらつくのですか?

森島　僕は選手時代、味方に文句は言わないように心掛けていたのですが、たまに熱くなって審判員にちょっと強く言ってしまってイエローカードをたくさんもらっていた方だったので、大変申し訳ないなと…。ただ、自分たちも審判員が嫌いで文句を言っているわけではないですし、サッカー選手は終わった後に握手をするということが先ほど出ましたが、自分たちはしっかりとあいさつをしなくてはいけない。ありがとうございました、という気持ちは持ってプレーしています。反省もしながらですが…。ルールでそうしなくてはいけないと思っているというよりは、個人的にもやっていいことと悪いことが分かった中で戦っていると思います。感情的な部分はもちろんありますが、コントロールはできるのではないかと思います。

山口　本当にサッカーの選手を見ているとすばらしいと思います。これが柔道だったら大変だなというようなシーンを見ながら、偉いなと思っています。でもサッカーを見ていて思うことは、時間が切れますよね。審判も上手に切ったりしてうまくコントロールしている。指導者として私も参考になるのですが、ちょっと時間を置けばなんてことない怒りってありますね。私がやっていたのは、試合が終わってすぐ選手を集めない。これがたった5分、10分置くことでスッとなるところもあります。上川さん、審判員の立場からはどうですか?

上川　森島選手の試合は何回か審判をさせていただいたことがありますが、ご自分でおっしゃるほどひどくはなかったというか(笑)、自分をよくコントロールされていたなと感じます。やはり瞬間的に感情的になるのはわれわれも十分理解できます。先ほどちょっと間を置くという話が出ましたが、自分も感情的になっているのであれば時間を置いて、話ができる状態であれば話をします。話ができない状態でこちらから声を掛けると余計、火に油を注ぐような状況にもなりがちなので、それはしません。もう一つ大事なのは、ちょっと気持ちが安定していないな、プレーより別の方向に気持ちが向いているな、と感じたときに、爆発する前に、先に声を掛けてあげる。そういうことをやっていたつもりではあるのですが(笑)。審判員はそういうことを考えながらやっています。ただ審判員をやっていて一番難しいのは、ベンチからイライラさせるような声が掛かるときですね。そんなときには僕らがやっているようなことをベンチでも感じてほしいです。今、選手がどういう精神状態でいるのか、プレーに気持ちが入っていないようなとき、そういうところを指導者も冷静に感じて、ベンチから声を掛けてくれるとわれわれも、ではそこは任せていいのだなとなります。

眞藤　そうですね、ベンチがポジティブな表現をすればそれは伝わっていくわけで、そうありたいと思います。

先ほど言われた第三者の目という意味では、全日本少年サッカー大会(全少)でも、技術の方から最初の代表者会議で「互いに声を掛け合おう」ということで伝えさせていただきました。その大会をご覧になっていかがでしたか?

綾部美知枝さん　©Jリーグフォト

綾部　今年もとてもすばらしい大会でした。本日、オープニングの映像で選手

宣誓を聞いていただいたと思いますが、あれが全てです。そして、今日持ってきたグリーンカード。特に全少ではこのグリーンカードをたくさん出そうと審判員にもお願いして、良いことをしたらとにかくグリーンカードを出します。例えば、選手が倒れていたら相手チームの選手でも気遣って起こす。そういう人道的な部分のカードです。今年の大会の準決勝終了時の審判員がすばらしかった。両チームの選手たちが本当にお互いを大事にしながらよく最後まで戦ったということで、試合終了時に両チームにこのカードを出しました。ここまでは比較的あることなのですが、その若き審判員は各ベンチに歩いて行って、それぞれのベンチにグリーンカードを出してくれました。私は鳥肌が立ちました。こんなに良い大会はなかった。しかもそれを若い審判員によって感じさせられました。この審判員には国際試合でも活躍してもらいたいし、私はこの審判員にグリーンカードを出してあげたいと思いました。このグリーンカードもどんどん使っていくことが大切ではないかと考えています。今年の全少は、あの選手宣誓に始まり、このグリーンカードに終わった最高の大会でした。

上川　選手だけではなく、指導者も褒められたらうれしいですね。褒められるとよりポジティブになっていける。綾部先生、良い話をありがとうございました。日本の審判員の将来も明るいですね！

眞藤　それともう一つ、相談役というのを山口さんがおっしゃいましたが、例えば指導者養成や講習会の間のところで、受講者が地元に帰って自分よりも上位ライセンスの人に指導実践を見てもらい、コメントをもらってきてくださいということを行っています。それを日常にも広げ、メンターと言いますか、指導者の身近なところに相談役がいれば変わってくるのかなと思います。そういう取り組みを具体的に進めたいと思っています。

上川　それでは、最後の「許さない」に入ってきたいと思います。

眞藤　ここのところは、今の延長になりますが、良いものを良いと伝えていくことが大事だと思っています。そういう雰囲気や意識を日常にもっていくことが文化になっていくのだと思います。時間がかかるかもしれないけれど、正しいことや良いことを地道に継続して示していく、認め広げていくことが一番だと思っています。

上川　良いものを良いとしっかり伝えていく。そうすることが社会の意識を変えていくことにつながる。社会の意識を変えることの重要性について、山口さん何かお話があればお願いします。

山口　非常に難しい問題ですね。日本はそういう歴史と文化の上に今がありますので。私も「巨人の星」や「アタックナンバーワン」世代で、これがスポーツだと思って育ってきた世代ですから、今さら悪いと言われても、と思っている方も多いと思います。ただやはり、昔と今は時代が変わって、社会が求めている人間をスポーツは教育していく責任があります。ただ我慢をして従順な子どもを教育して大人にしていっても、今の社会、さらには国際社会では通用しないと思います。スポーツ界、そしてこれから日本が国際社会で外交も含めてやはり世界に伍して戦っていく、日本の力を示していく、そういうクリエイティブな、イノベーションを起こせるような人材をつくっていくためには、我慢も根性ももちろん大事ですが、それだけではなく、自分で考える、自分自身を律していくことが大事です。私が暴力の問題で指導者の皆さんに言うのは、もしも暴力が良いというのであれば、一生面倒を見てやってください、ずっとどこへでもついて行って「僕はダメだ」というときに殴ってやってください、それをしていただけるのであれば、百歩譲って私は認めるかもしれない。でも社会に出たら、誰も暴力を振るってくれません。こうしろ、ああしろと言ってくれません。自分で行動しなくてはならない。それをスポーツで教わっているのだと思います。サッカーでは、自分で立って、自分で考えて、どうパスするのか、シュートするのかを決めなくてはならない。そういう人間を育てていくことがサッカーを通じての人間教育だし、すばらしい日本人であり国際人をつくっていく。皆さんは「スポーツと暴力の問題か」と考えがちかと思うのですが、そういう意識を持つ必要があると思います。私は日本全体が今、スポーツではこういうことが起きている、でもそれは日本が抱えている問題なのだという意識をスポーツから教えられて進んでいくことが大事だと思っています。

綾部　私は、子どもたちとサッカーに出会ったときに、サッカーが良いなと思ったのは、まず個人競技ではないということでした。サッカーは11人で勝利を目指すスポーツです。攻めたり守ったり、間をとったり、状況に応じて今自分が何をすべきか、何をすればチームのためになるのか、常に考えながらプレーをする。これは、年齢が低ければ低いほどそうで、一人でやる孤独さはなく仲間がいるというすばらしいスポーツです。この経験が大人になって実際に社会に出たときに自分のポジションや役割を考えられる、ここに結びついているということを、常に小学生の指導者は考えていただきたい。今が勝負ではないということなのです。私は、子どもたちがチームワークや人間関係を学ぶ場としてサッカーが重要な役割を果たすということを考えてきたので、子どもたちと今日まで続けてくることができたと思います。勝つことも負けることも、この経験は全てが財産になると思います。サッカーのすばらしさを、子どもたちを通して教えてもらいました。

眞藤　子どもが自分に合ったクラブを選んでいけるようにしていきたいと思っています。しかし、実際には簡単なことではありません。そこに所属していることで満足していたり、辞めるといろいろなところに迷惑が掛かるというプレッシャーもあったりします。でも、社会に啓発し、自分がここのクラブに行ってやりたいと選んでいけるような状態をつくっていけたらと思っています。クラブに対しても、「健全育成クラブ」と言いますか、安心、安全に子どもが活動できたり、ライセンス指導者を適正人数で配置していたり、クラブでリスペクトに取り組んでいたり、また、例えばAED（自動体外式除細動器）を身近に置いているとか、いろいろな取り組みがあります。誠実に良いものに取り組んでいけるようなものをつくっていけたらと思っています。また、将来のある子どもたちに、「リスペクト、大切に思うこと」を伝える取り組みをしていきたいと思います。

上川　良いことを良いと伝えること。それがクラブからの発信であってもいいわけですね。そしてそういう良いクラブが、クラブ同士で良い意味の競争意識を持ってもらう。そういうクラブがたくさんあれば、選手だってどこのクラブに行こうかと、楽しみになりますよね。少し時間がかかるかもしれませんが、スポーツ界が変わっていければ良いと思います。

森島さん、先日、全少のリスペクトワークショップにご参加いただき、子どもたちにリスペクトについてお話をしていただきました。子どもたちから受けた印象や感想はどのようなものでしたか。

森島　リスペクトの映像を流した後に、子どもたちとディスカッションをしました。都道府県を代表してきた選手たち一人一人が、リスペクトについて考えているのだな、こういうことが大事だというのをしっかり認識しているな、と感じました。全少に出場した選手たちが都道府県の代表としての模範ともなるので、そういうことを発信していくことで全国にリスペクトの大切さを伝えていけるのではないでしょうか。その翌日、決勝戦を見て、子どもたちがリスペクトの

気持ちを自然と行動に移せているように思いました。今は僕が選手のときと比べても、そういうところの意識が全体的にしっかり持たれているように感じます。いろいろな人たちが輪を広げ、大切さを伝えていければと思います。

上川　子どもたちへのリスペクトの働き掛け。良い影響があったと考えます。そのワークショップの進行に関わってくださった北野さんに来ていただいています。

JFAキッズプロジェクト・北野孝一　ワークショップの司会進行を務めたのですが、今、森島さんが言われたように、子どもたちは本当に意識していて、審判員、家族、指導者等に対して、大切に思っているということをそれぞれ自分の言葉にしてくれました。他のチームの選手も大事な仲間だということを言ってくれました。

先ほどからのお話を伺っていて、この先のことを考えていくとしたら、この子どもたちにそういった思いを持ってサッカーを続けてもらいたいと思います。われわれ指導者としても、子どもたちから学ぶことが多いです。全国大会に来た子どもたちが、そういう思いでプレーしているから先につながっていくのだろうな、指導者の皆さんもそういう子どもたちを見ることによって学ぶことがあるのではないか、そう思います。私自身も、たくさんの子どもたちの前で話をしながら、子どもたちの書く言葉を見ながら、自分自身が反省するようなところもありました。そういったことをあらためて感じることのできた、今回の全少でのリスペクトワークショップでした。

眞藤　私は参加できなかったのですが、後からいろいろと資料や子どもたちの宣言を見せていただきました。子どもたち自身が考えて、それぞれに自分の言葉でいろいろなことを書いているのですが、これが子どもたちそれぞれの心に残れば、生涯に生きていくのかなと思います。こういう取り組みをもっとやっていく必要があると思います。

上川　指導者も子どももお互いから学べる。こういう良い連鎖が将来に向けて広がってほしいですね。まだまだお話ししたいことがたくさんあるのですが、時間の関係でこの辺でまとめに入らせていただきます。暴力という問題は根の深い部分で、いまだに大きな問題になっています。しかしわれわれは、子どもたちの将来に目を向けていかなくてはなりません。それを考えると、スポーツの本質、すばらしさをわれわれ自身がしっかりと理解して、子どもたちの将来のために指導していく必要がある。だからこそ、指導者だけではなくて、そこに関わる全ての人が手を取り合って取り組んでいく必要があると感じました。今日のディスカッションはリスペクトの観点から実施させていただきましたが、リスペクトがいろいろな人の心を育てていくということも再確認できたと思っています。大切に思う気持ちを今後も継続して伝えていきたいと思います。

ここで、サムライブルー（日本代表）のアルベルト・ザッケローニ監督からのメッセージお聞きください。

リスペクトF.C.JAPAN監督のアルベルト・ザッケローニです。選手と監督の間にはリスペクトがなければなりません。それぞれの役割、立場の尊重が必要です。 監督としては選手の立場をしっかりと尊重し、監督と選手の間に明確で現実的な関係をつくることが大切です。当然、選手も自分たちの立場をわきまえて、しっかりと指導者の役割を尊重していかなければなりません。その相互関係によって良い信頼関係ができるのではないかと思っています。それは、スポーツだけでなく、人生でも同じです。

上川　本日話し合われたことを皆さんもぜひ、それぞれの指導の現場で意識していただき、そして自分の場所だけではなくて、周りに広げていっていただければと思います。最後になりますが、皆さんから一言お願いします。

綾部　リスペクトをすると、こちら側の気持ちが温かくなります。そして、周りも温かい気持ちになる。逆に、怒鳴ったり叩いたりすると皆が嫌な気持ちになる。でもリスペクトはすればするほど、周りの人の気持ち、その本人も気持ちが良くなるということをぜひ、指導者の皆さんからお伝えいただきたいと思います。日本のワールドカップ出場決定の日に話題となった“DJポリス”のあの言葉が、日本のサポーターをリスペクトしたので、あれだけの人々を上手に誘導できたのだと思います。彼をリスペクト・フェアプレー委員会で表彰したいほどの感動を覚えました。

山口　私も今、偉そうなことを言っていますが、若いころは暴言も吐きましたし、頭に来てゴミ箱も蹴ったし、懺悔（ざんげ）しなければいけないことは山ほどあります。ただやはり、指導という過程の中で分かってきたことは、選手や子どもは自分で伸びる力を持っているということです。先ほどお話に出たその小学生大会で、おそらく1回戦から勝ち上がっていく中で、指導者が教えられない多くのことを子どもたちは学んで伸びたと思います。そのことを私たち指導者はきちんと理解して、指導者の仕事は、親もそうだと思うのですが、育てるというよりはその環境をいかに与えてあげられるか、伸びるような環境をどうつくっていくかに力を注ぐことの方が大切だと思います。そして、一人では子育てできないのと同じように、一人では選手を育てられません。いろいろな方に助けていただきながら、皆で力を合わせて、選手や子どもたちを育てていくのだと思います。自分に言い聞かせるように、スポーツ界が皆で手を取り合って頑張っていきたいと思います。

森島　今日、自分もこの場に来られて、自分が指導者という新しいステップに進む中で、いろいろな人とコミュニケーションをとって話を聞くことが大事だと感じました。そして皆さんが言われたように、子どもたちのことを考えて、子どもたちから学ぶものがたくさんあり、そのことがとても大事であるということをあらためて感じました。子どもたちが、サッカーが好き、やっているものが好き、というのが一番大事だと思いますし、熱中し自然と笑顔が出る楽しさがあるからこそ続けられると思うので、そういうことの大切さを忘れずに、今後、指導に携わっていきたいと思います。

眞藤　私自身は、子どもも大人も関係なく、互いが人として大切に思うことというのが一番大事だと思います。指導者としては、子どもと一緒に成長していく喜びを感じてもらう中で、子どもが大人になったときに指導者に対して感謝していくようなものをつくっていきたいと思っています。一歩一歩地道に努力していきたいと思いました。

上川　皆さんどうもありがとうございました。ぜひメンバーで力を合わせてサッカー、スポーツの価値を高め、それをしっかりとした文化として根付かせていければと思います。また、サッカーを越えてスポーツ全体へ、スポーツを越えて社会全体へと発信していきたいと思いますし、そういう発信をJFAとして進めていきたいと考えています。ぜひ皆さんもご協力ください。よろしくお願いします。